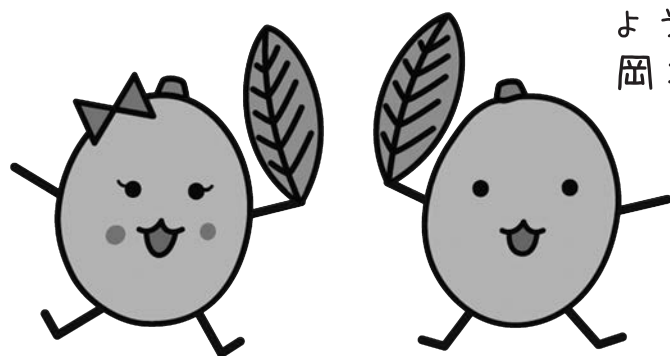


2019年度  
地域連携事業【岡垣町／九州共立大学】

# 岡垣学Ⅲ

～ 岡垣町の地名考証 ～



ようこそ  
岡垣町へ!

東部（上畑・海老津・山田・黒山・糠塚・戸切）

中部（野間・高倉・吉木・松原・三吉）

西部（手野・内浦・原・波津）



**[ 出 典 ]**

石井 邦一 著  
『岡垣のむら里を訪ねて』（岡垣町勤労者協議会記念誌刊行委員会）2016

## はじめに ～『岡垣学Ⅲ』の発刊にあたり～

岡垣町と九州共立大学の地域連携協定に基づく地域連携事業、『岡垣学』プロジェクトも3年目となり最終号を迎えることになりました。プロジェクトは、本学の学生が地域の住民のみなさんと協働しながら地域の魅力を再発見し、冊子として編集した成果物を活用して町内外に広報するボランティア活動です。

『岡垣学Ⅰ』では、岡垣に伝わる歴史・伝統・習俗などをテーマに整理し、歴史豊かな町の歩みを再発見しました。その中には、ぜひ後世に伝えていきたい行事や風習も多く含まれていました。『岡垣学Ⅱ』では、伝統の食と豊かな水資源に関する特集をしました。町内には再発見を、町外には町の魅力の発信として活用できれば地域活性化の一つの切り口になるのではと考えられます。最終号の『岡垣学Ⅲ』では、地名考証に取り組みました。

このテーマに設定した経緯は、岡垣町民の方から岡垣町に関する書籍を提供していただいたことによります。この書籍は、岡垣町史の編集委員としても参加された石井邦一氏の著書『岡垣のむら里を訪ねて』（岡垣町勤労者協議会記念誌刊行委員会、平成28年4月1日）です。『岡垣学Ⅲ』は、この資料を基礎として、学生がその内容を再編集して成果物としました。地域理解の一つとして活用していただければ幸いです。

これまで3年間にわたり、本学の学生が地域活性化に資する社会貢献ボランティアを実施してきました。地域連携協定による事業を通して、町長をはじめ町役場のみなさん、地域で活動されている各種サークルのみなさんに多大なご支援をいただきました。また本活動に多くの町民のみなさんのご支援をいただきました。岡垣町のすべての方に心より感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

九州共立大学 スポーツ学部

山田 明





【プロジェクト・メンバー】

指導教員	九州共立大学スポーツ学部	山田 明	
活動した 学 生	九州共立大学スポーツ学部3年	今井 智紀	九州共立大学スポーツ学部3年 大賀 康平
	九州共立大学スポーツ学部3年	勝倉 稚葉	九州共立大学スポーツ学部3年 川勝 陽祐
	九州共立大学スポーツ学部3年	川上 滝盛	九州共立大学スポーツ学部3年 小村 隆文
	九州共立大学スポーツ学部3年	佐々木 悠祐	九州共立大学スポーツ学部3年 谷井 友哉
	九州共立大学スポーツ学部3年	轟田 紳一郎	九州共立大学スポーツ学部3年 中田 博継
	九州共立大学スポーツ学部3年	中島 歩実	九州共立大学スポーツ学部3年 早川 祥平





# 目 次

---

はじめに ～『岡垣学Ⅲ』の発刊にあたり～ (山田 明)

プロジェクト・メンバー

## 東 部 編

1～7

- ① 上畑
- ② 海老津
- ③ 山田
- ④ 黒山
- ⑤ 糠塚
- ⑥ 戸切

## 中 部 編

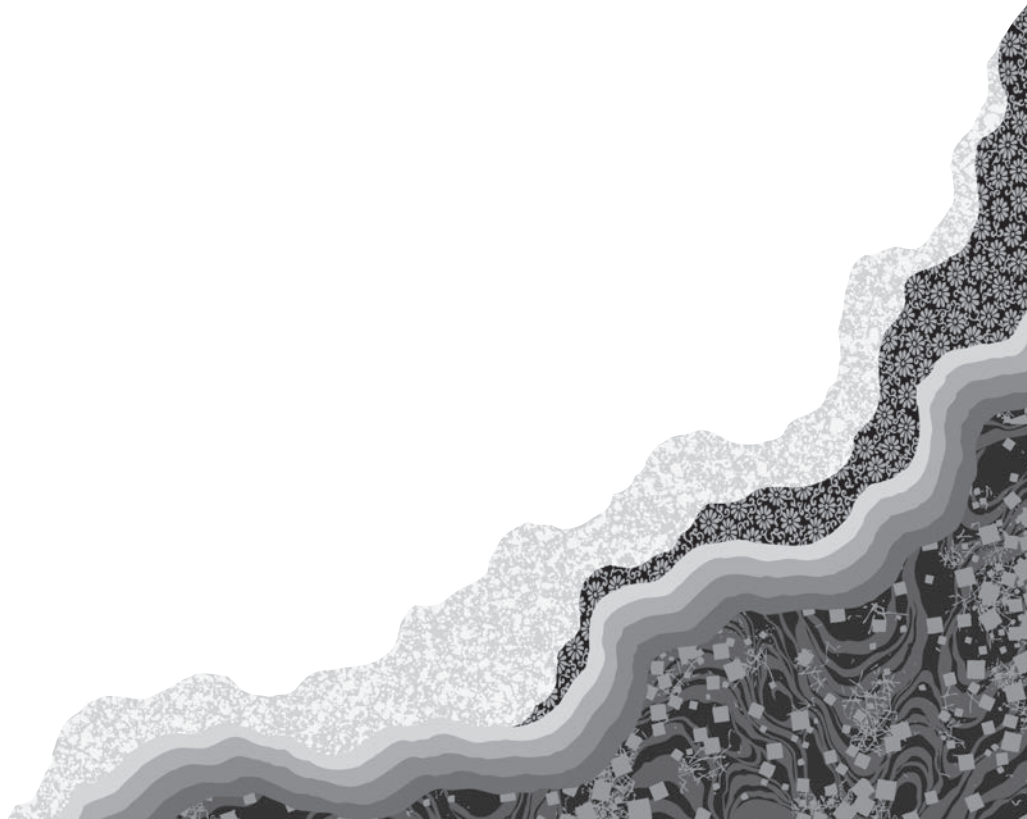
8～15

- ① 野間
- ② 高倉
- ③ 吉木
- ④ 松原
- ⑤ 三吉

## 西 部 編

16～21

- ① 手野
- ② 内浦
- ③ 原
- ④ 波津



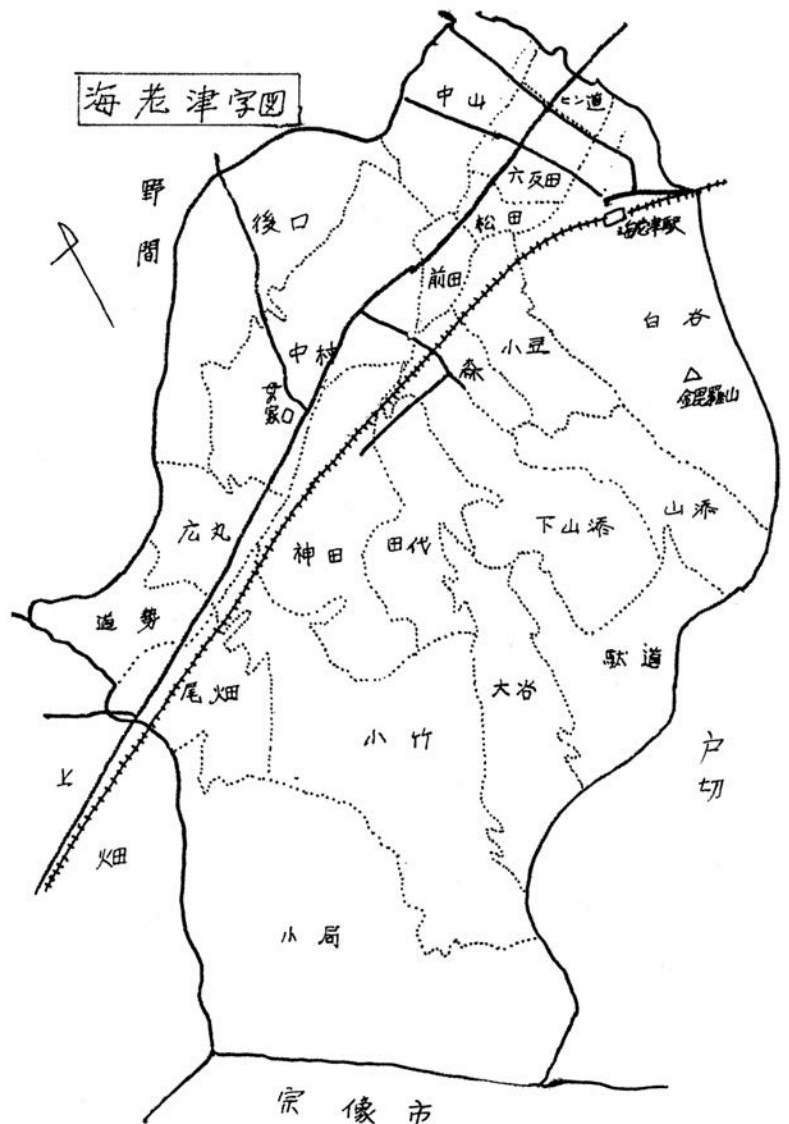
# 東 部 編

## ① 上畑

上畑は、昔は城畑と言ったのは、蔦ヶ岳城の直下にある村としての存在を意味したものである。上畑の「上」は、平地に対して山手を指す言い方であろう。本来の地名は「畑」である。『字訓』には畑の字を「火 + 田で水田に対して、焼畑による陸田をいふ」と説いている。畑という地名は県内でも多く見られる。近い所では宮若市若宮の畑や、宗像市の畑、北九州市八幡西区畑貯水池がある畑などがそれで、いずれも山深い村里である。〈門司口〉城の東口が門司の方向にあることから、城の構え口の呼び名である。戦国時代の筑前域の山城では、東口をこの呼称で言う例が多い。〈大膳塚〉『日本書紀』仲哀紀にある高倉神社の祭神大倉王と兎夫羅媛を、仲哀天皇の命で祀った伊賀彦の後裔に伊賀大膳亮つぶらひめがいて、高倉神社を祭祀する上での最盛期を築いたようである。その墳墓が大膳塚であるが、それが古墳であるのかどうかは明らかではない。大膳塚の字名は高倉にもあり、上畑の東部で両社はつながっている。この地域はすべて山地である。〈山峠〉この字地は上畑から高倉に通じる道路の村境に位置している。この村境が峠になっていて、越えれば高倉である。〈笠松〉赤鳥居から城山峠までの、JR 鹿児島本線沿いの谷間が笠松である。地形は、両側から笠で覆われるように山が迫っている。松は末にも通じるので、村の端であることと山峡の状態を示した地名で、大きな枝振りの松もあったのではなかろうか。〈堀田〉海老津との村境に位置した場所であるが、ここもほとんど山地である。「堀=ホツ」は山の背を意味し、周辺に焼畑が営まれた場所かもしれない。〈長谷〉長谷は、文字通り山と山の狭間をなす谷合いが長く続いた地形である。ここを抜ける道が、かつての唐津街道ではと考えられるが、街道の海老津字道勢から峠までの道筋が、まだ確認されていない。〈泉水〉山は呉音で「セン」である。だから泉と山は語音で同義語と見るべきであろう。以前、まだ山神堤がなかった頃、山神からの山水を山腹に溝を掘り、下の本村である山ノ下の方に取水していたと聞いた。その山水が流れおちる場所が、泉水だったのではなかろうか。〈唐人山〉唐人焼の項で書いた陶工たちが、窯をつくり居住した場所そのものであり、こうした地名は歴史地名（または伝承地名）とされる範疇である。〈山ノ口〉文字どおり、山への入口の意である。この場合の山は、森林も含めた意味を持っている。〈土取〉この字名も、そのまま「土を取るのに適した土地」と解してよいだろう。上畑には、山ノ口から野地ヶ谷、葉ノ内にかけて三ヶ所ほどの溜池があるが、これは何れも明治以前に築造されたものである。溜池づくりには堰堤を築くために大量の土が必要である。同時にその土が運びやすい場所でないといけない。こうした条件に合った場所が、おそらく土取であろう。唐人焼の窯をつくるのも、ここの土が使われたかも知れない。〈灰ヶ谷〉一般的には「灰」は「南風」の転化した用語として用いられることが多い。とすれば、「南西からの風が吹き抜ける谷」となる。石峠に連なるこの谷は、城山と金山の鞍部を南風が吹き抜ける場所である。「灰」にこだわれば、唐人焼の窯灰を捨てていた場所と言いたいが、それではいささかこじつけの感がする。〈葉ノ内〉葉は音読みで〈ヨウ〉であり、漸は訓読みで〈ようやく〉と読み、ここでは葉=漸を当てたもので、漸は、「ゆるやかな」と言うことである。したがって、この場合は山の「軽傾斜地」を意味する地名と考えられる。〈野地ヶ谷〉野地は沼地や湿地を表す地名と言われるが、野地田という地名では「高台の原野で痩せ地の焼き畑」を指しているか、ここでは幾分か湿地を伴う山麓の谷合いであろう。〈火渡〉火渡は「樋渡」で樋は水や川を意味する。この場合は「川を渡る場所」、すなわち矢矧川を渡る渡河地点と解される。〈牟田田〉湿地や、沼地・沼田などを牟田と言う。その地にある田圃の意である。

## ② 海老津

〈海老津〉「海老のように曲がった地形」を現したもので、「津」は入り江や港・船着き場などを意味している。〈白谷〉「白く乾いた砂土が多い土地」といった意味合いがあり、山間の不毛の地だったことを示している。〈小豆〉「ショウズ」はその地に小さな細流があることが由来であろう。〈森〉白川静博士の『字通』には、森についての会意として「わが国ではもりは神の住むところ [万葉] に [神社] を [モリ] と訓する」とあるようにこの小字名は、かつてここにあった白峰神社の神地だったことを物語っている。〈山添・下山添〉「山添」の西に隣接するのが「下山添」であり、「山添」の方は金比羅山塊に直接続く山地だけに、主峰の金比羅山の傍に添った土地の意である。〈駄道〉駄は「馬の背に駄載すること」と『字通』にあり、字駄道は、駄馬に荷を曳かせる荷駄道があることで付いた字名。〈大谷〉地域の中央部の谷間には、明治初期頃まで五戸の民家があり、海老津の枝村の一つだった。この地にいた人々は大谷姓を名乗り本村に移住した家も数軒あるようである。〈田代〉「田をこしらえたところ」の意で、この場合は新田を意味している。〈神田〉この地は字森にあった白峰神社に至近の場所なので、その新穀を奉納するための社地だった可能性がある。〈小竹〉「コ」は三方に張り出した山辺を意味し、「タケ」は崖や岳のようにやはり山に関わる地名である小高い山に囲まれた地と云った。〈小局〉伝承地名である。〈尾畑〉尾は小局から流れてきた川が矢矧川と合流する地点、すなわち川尻であることを示している。畑の場合は、ここが海老津村の端（ハタ）であることを意味する。〈道ノ瀬〉字道ノ瀬は、ここが唐津街道から上畑に入る道の分岐点、すなわち分かれ道だったことからきた地名と考えられる。〈広丸〉「広」は文字通り「広い」で、「丸」は「丸みをもった」と云う意と思われるので、この場合は「丸みを帯びた広い台地（山地）」と理解してよいだろう。〈四反田〉農村部に多い耕作地地名で「四反の圃場がある所」。〈前田〉「集落の人家の前の田地」とした単純な位置を示した地名と見て差し支えないだろう。〈松田〉「松」の地名は「うしろ・奥」を指す場合もあるので、この場合は字前田後ろといった方向地名とも考えられる。〈六反田〉この辺りは六反と言う地積のとおり田地だった。〈ヒン道〉「ヒン」に「頻」の字を当てると「頻道」となる。すなわち「村人が頻繁に通った道があるところ」と解すればヒン道となる。〈中山〉村の中央部の丘陵台地で野間村の字世々町に接している。〈中村〉「ナ」は土地を意味する場合が多く、「ナカ」は中間なので、村の真ん中の場所と解していいだろう。〈後口〉「口」は入口を指すので、この場合は「村の背後からの入り口」と云う意味合いである。





### ③ 山田

<恋ノ田>「恋」の字が地名に用いられている例は珍しい。本来は「鯉」または「鵠」（白鳥のこと）などが当てられていたのではなかろうか。地名的には「鯉」の場合、「鯉口」の意味に通じれば地理地名として納得できる。<赤井手>「井手」は堰のことである。「赤」を付けているのは、この辺りの小川や地下水が周辺の直方層群の地層であるため強い酸性をあげて、地肌を鉄色に変色させていることからであろう。<茅原>「茅」は、チガヤ・スゲ・ススキなどの、屋根を葺くのに使う草木の総称とある。したがって茅原は、文字どおり茅類が生い茂る丘陵だったはずである。<猿田>茅原の東に隣接する地域で、いまは水がない空池である猿田池があり、野間に隣接している。<櫛>クヌギと読ませているが、字はカイとしか読まず松脂のことである。赤井手に隣接する地域で隣接の水洗との境を唐津街道が抜けている。<水洗>川の対岸は山が迫って平地がなく、たまに大雨で川が溢れると平地の「水洗」の方に流れ込む。こんな状況をそのまま地名としたものであろう。<山下>水洗の対岸の山であるが、矢矧川の左岸に沿ってわずかに住宅があるが、この部分は西山田区になり、背後の山辺も開発され斜面を利用した住宅地になっていて、静楽荘団地と呼ばれている。<内田>地名としては、矢矧川が右曲する内側の田圃と云う意味であろう。<平田>唐津街道を挟んで、内田に隣り合わせの地域が「平田」である。<登り立>「ノボリタテ」であるが、ここから登り坂となる丘陵台地である。<鍋田>鍋田は「鍋田溜池」に代表される地域で、遠賀町境から山田峠そして高陽に連なる丘陵台地の中央部である。<古鍋田>地名は形状地名で、「鍋」は「滑らかなところ」を意味し、そのなだらかな山地の谷間に鍋田池がある。<古森>「コモリ」の地名は、沼池・洞・窪地を意味する場合が多い。古森は、古鍋田の北に接する台地である。<飛熊>地名の「飛」は、「隔てる・離れる」と云う意味があり、「熊」は、「隅（クマ）」に通じる。本村にあるお寺寶樹院は、元禄の頃までこの地にあり光蔵寺と呼ばれていたと言う。<山ノ後>岡垣で、吉木の門田溜池と並んで大きな規模の「一丁溜池」がある広範な地域である。<沖>沖の地名は、本来は「海浜や海よりの所」といった場合のものであるが、たまに内陸部では沖＝奥として用いられることがある。<楠ノ木>一丁溜池と山田本村の間にある山地で、その中心部の標高は五〇mの山が盛り上がっている。「楠・楠ノ木」の地名は「超える」という意味に用いられるので、この地名は山越え道がここにあったことに由来するものと考えられる。<押田 宮ノ尾>宮ノ尾を中心に地蔵面・押田といずれも山田本村の集落地にある。<地蔵面>南寄りの押田から山沿いの地蔵面、その下部に宮ノ尾と三つの小字が集まっている。すなわち押田の西隣の「柚木田」を含めて本村の区域である。<柚木田>柚はユヅの木のことであり、ミカン科の常緑灌木である。おそらく、ここに柚木の栽培がおこなわれたことによる地名かとも思われる。<植田>植田は文字通り、稲を植える田の意で、おそらく稲作が始まった最初の頃の田んぼではなかろうかと思われる。地の利から見ても本村に近く、この地は矢矧川によって運ばれた沖積地である。<高原>植田に隣接する字である。この場所の東方は糠塚に接している。その境界域は、糠塚との間に標高三〇mほどの山を巡らしている。<蓑田>字高原の西隣が蓑田である。蓑は、茅・菅の茎や葉、またはシュロの毛、ワラなどで編んだ雨具である。<石ノ小田>この地名は、矢矧川が流す砂礫が多い土地といった意味であろう。矢矧川河畔の典型的な沖積地で、全域が田んぼである。<六田>北東を糠塚に接する田圃地である。西は矢矧川に沿っている。「六」は田圃の枚数ではないだろうか。<柳>読みは「ヤナ」だと思うが、矢矧川の右岸に近い田地である。柳の木が田の畦などに植わっていたのだろうか。<森免>南北に長い地で、その中を唐津街道と矢矧川が貫通している。「免」は、地蔵面の場合にも触れたように貢租の免除地である。<大坪>形状地名で、「深く入り込んだ谷」、または「やや大きな谷、または盆地」といった意味である。「大坪」の地形は、山田村の北西域を黒山との山境で分かち、南域は一丁溜池に接している。<中西出>小字地図には中西出は出てこない。それだけに所在の確かめようがないが、明治二十一年当時の小字地整理で無くなった小字かもしれない。<北分>山田の北域で黒山との境界線でもある。範囲は東西に長く伸びていて、西部域が山地、東部域は田地となっている。<イシキ>場所は山田の北東部にあり、矢矧川の左岸に長く伸びた字である。「イシキ」の地名は「少し高い川底」で、「シキ」は砂礫のこととされている。



#### ④ 黒山

<楠ヶ久保>「楠〈クス〉」は〔①楠木②越える③崩れる〕などを意味して用いられるが、「久保」の場合は一般に窪地を言うので、この場合は楠木が多い窪地と言った意味合いだろう。<宇土>「宇道」すなわち「凹道」や「狭い峠道」と解する場合もある。明治の頃の造成された芦屋道も、元松原側からは登り道となり宇土に入ると下り道になっている。土地の形状からきた地名と考えてよいだろう。<中浦・大浦>両者とも黒山の南西部の縁に位置し、北辺は芦屋道に沿った田圃が開け、南側は山地である。田圃がある場所は低地で、縄文海進期には海だったところから「浦」地名が付いたものだろう。「浦」は入り江を意味している。<高尾・塚田>「高尾」は「高い尾根」を意味したものだろう。ここは吉木の字三松から通じる丘陵の山道では、最も高い場所であり、現在、給水タンクが設置されている山は標高が七一・八メートルある。「塚田」は高尾の北部につながる傾斜山地で、地名はこの地に人や物を埋めた塚があり、低地は田で稲作が行われたことによるものであろう。<北分・山ノ中・二反代・沖>北分の字名は隣り合わせて山田にもあり、山田村からすれば北域のこの場所を黒山村との村境とする村分けを意味する地名であろう。字「山ノ中」は、文字どおりの山の中であって一部入りくんだ谷があり、後は平地に突き出した丘である。「二反代」は、字北分の北東に隣接し、山田の北分とも隣接している。「二反」は畑の面積で、代は段丘を意味する言葉なのでこちら辺りまでが、丘状の台地だったはずである。字「沖」は、海寄りの干拓地に多い地名である。ここで触れた字地名は、すべて東黒山

に所属している。この後は再び西黒山の領分となる。＜鋤崎・山ノ口・嶋井崎＞「鋤崎」の地名は、「スキ」は田畑を鋤く鋤のことではなく砂礫地を意味し、「崎」は狭間や先端を意味する地名である。「山ノ口」は浜山への入口の意味で、ここからの芦屋道は峠道になる。次の「嶋井崎」は、「嶋」は「田のある所、または村」、「井」は「水路や水を汲み取る所」の意で、「崎」は「狭間」なので、「水路がある狭間の場所」とでも解したい。＜山池＞嶋井崎の東に隣接する地で、文字どおりこの地に堤が設けられていることに因んだ地名であろう。＜孫助谷＞芦屋道が東黒山に抜ける峠道があり、現地の地形は北と南の山地に挟まれた谷間である。以前、西黒山の古老から、昔はこの峠道に狐が出て峠越えする人を騙していたと聞いたことがある。芦屋まで馬車で荷駄を運んでいた孫助が、ある日この狐に騙されて松原のなかに迷い込んだと言った話である。この辺りは道の両側は山林で、昼でも人気のない寂しい場所である。この孫助の名が付いた谷間でもあろうか。＜浜田＞孫助谷の東隣の地で、東黒山の領域である。この辺りから田圃が開けてくる。「浜」は岸、または土堤の意味がある。この辺りは芦屋道の北側は松原、道路の南側は斜面で下には東方に流れる矢矧川まで田圃が広がっている。浜田は、この地形からきた地名だろう。＜牟田・稲葉＞いずれも字浜田の東に隣接する字地である。「牟田」は湿地や泥田を意味し、「稲葉」は「稲架が普及する前に稲干場としたところ」で、各地に共通の地名がある。稲葉は、矢矧川に沿った場所である。＜道中畑＞「どー」は「峠のタワ・タオの転訛」とされ、また「畑」は「端・傍」に通じるので、この場合は孫助谷の峠道にある畑地と解してよいだろう。＜椎黒・裏ヶ谷＞「椎黒」は椎の木などの雑木がある山林であろう。「裏ヶ谷」は、「ウラ」は北を指す言葉でもあり、ここでは南を千手寺があった「上の寺」に隣接しているので、「千手寺の裏の谷」と解してよいだろう。＜上ノ寺＞中世に存在した大寺、千手寺の跡地である。＜蒔崎＞「蒔崎八戸」と記載される集落が現在も続いている。往時には「厩崎」と称していたようである。＜松ヶ下・宇田・宇田ノ下＞「松ヶ下」の地名は、「マツ」は山腹のことを言うので、巖島神社がある峰頂の下に開けた土地との意味合いと思われる。「宇田」は、字「松ノ下」の北側背部に位置し、砂地で湿度のある土地を言う。「宇田ノ下」は、「宇田」の東部に隣接する地域でほとんどが田圃である。＜道手・松尾＞字「道手」は、「上ノ寺」の南に続く台地で、西黒山と東黒山を結んだ県道黒山－広渡線が中央部を走っている。字「松尾」は、道手の南に接する山地であるが、今では宅地造成の波に吞まれて全域が住宅地になっている。＜和田・小崎＞「和田」は「やや広い円みのある入り江」を意味する地名である。「小崎」の崎は狭間を意味し、平地に突き出した和田の丘陵と、「二反代」の林野に挟まれた地形からきた地名である。＜神田＞「神田」は、文字通り「田の神を祀る田」であり、または「神社の諸掛かりを賄う田」の両方の意味がある。＜一丁田・縄手ノ上＞字「一丁田」は、その名のとおり地積が一町あることから来た名称である。「縄手ノ上」は矢矧川の左岸域である。＜蔵ノ下・九反坪・唐戸口＞「蔵ノ下」は、クラは鞍に通じ、この場合は人が住む村落が鞍であり、その下であることの意であろう。「九反坪」は地積としての九反であり、坪は1町歩を意味することもあるが、他に「庭」や「窪み」とも解されている。「唐戸口」は、唐戸はカラドで「框を組んで間に板を入れた扉」のことである。＜池尻・五反間・千手寺田＞字「池尻」は、上ノ寺にあるため池から流水が落ちる所の地名。字「五反間」は、五反は地積が五反であること。字「千手寺田」は、唯一、千手寺の名を遺す地名であること。＜山毛下＞西黒山－東黒山－芦屋に抜ける道路筋そのもので、東西に細長く伸びた字地である。＜浜山＞三里松原の全域で最も懐深い場所である。

## ⑤ 糠塚

＜友田＞字名の友田の「トモ」は、①分村②堤などの意味がある。「トモ」は船の艫（船尾）、すなわち村の後方の意味であろうか。＜高丸＞友田の西に隣接し、面積の三分の二は山地であとが田圃である。「タカ」は高い所、「マル」は円みを持った山の意であろう。＜藪ノ元・四反田＞字藪ノ元は友田の谷間から西に繋がる平地で圃場である。現在は全域が田圃であるが、古代にこの流域が海だった頃から干潟となった段階で竹藪となっていた土地の意味である。字四反田は、田圃の地積をそのまま示したものであろう。＜天神領・長ヶ坪＞字天

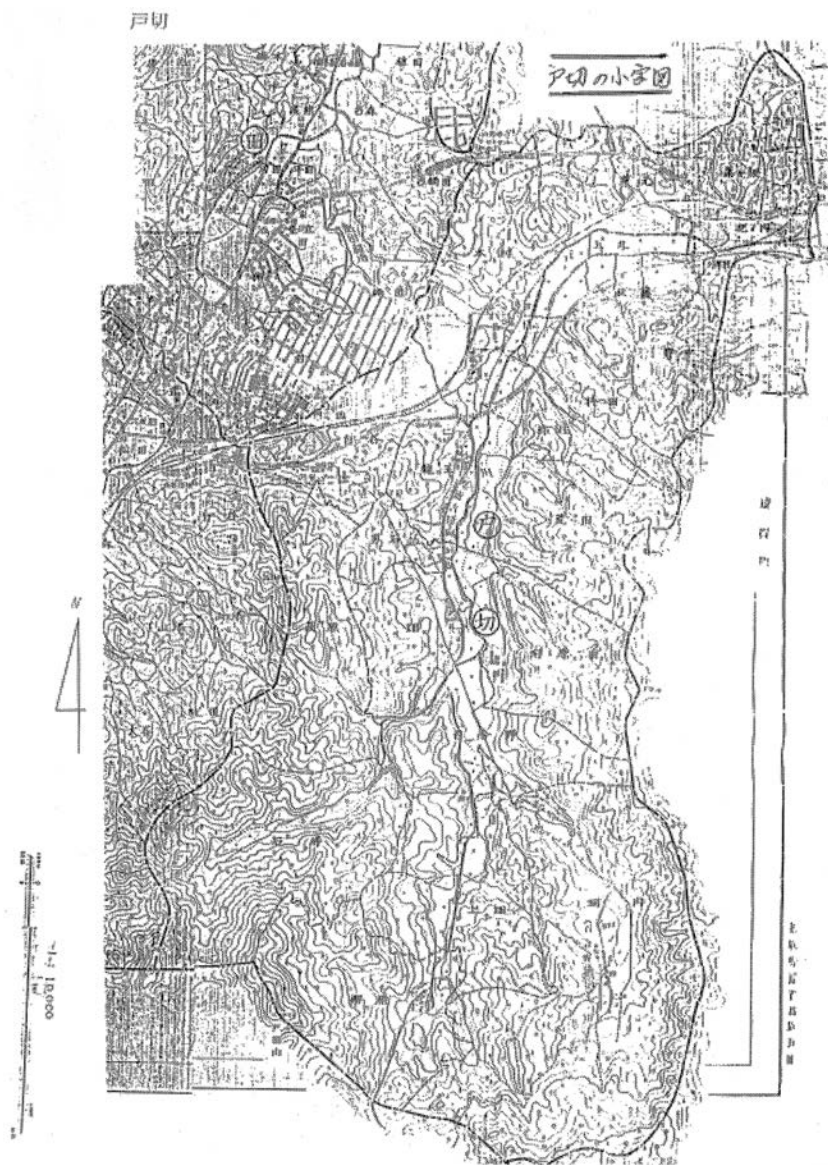


神領の「天神」は、天神様すなわち地ノ神もしくは菅原道真を祀るお宮である。領は「天神様の領有地」であり、すなわちこの地が天満宮の賄い田だったのだろう。字長ヶ坪は、前牟田橋を起点に三角に延びた土地で、「坪」は庭とか、村の小さな部分を意味する言葉、ここでは細長い小さな土地と理解してよいだろう。＜前牟田＞旧唐津街道が山田村を経て矢矧川を渡り、糠塚村に入る玄関口の地である。字前牟田の名は、牟田地名が矢矧川のもっと下流部にあるので、その前にある土地とする「前」であろう。「牟田」は湿地や泥田に特有の地名である。＜黒石＞「クロ」は小高い所で、「イシ」は小石が多いところの意味である。＜南ノ前・南＞「南」は方向地名であるが、この場合は本村の南を指す地名であろう。字南ノ前は、字南の前（南側）にあるという位置を示す地名である。＜墓ノ尾・二又＞「墓ノ尾」は、文字どおり墓所のある場所であり、「尾」は尻の意があるので「墓がある村尻の地」と言うことになる。「二又」は、二つに分かれることで、これも尾崎村との境域を示して、ここで二つの村が別れることを示唆する地名だろう。＜町＞「町」には「商店の立ち並んだ繁華なところ」の意味の他に、「人家が密集し、道路で分けた一区画の名称」と言う意味もある。＜本村＞糠塚の本村である。＜西ノ前＞本村の西に接しているので「西ノ前」であり、位置を示す地理地名である。＜蔵ノ上＞「クラ」は倉・鞍に通じ、鞍部であることを表示する地形地名と思える。＜北原＞「原」は原＝壑（ハ）りに通じ、開墾地を意味する場合がある。＜松木園＞江戸時代の一大事業だった三里松原造林の際の松苗を育成した苗畑の跡地である。＜小堤＞堤は、溜池のことである。場所は糠塚の東域で遠賀町尾崎に接している。＜瀬戸＞小堤の北隣にあり、全域が山地である。瀬戸という地名は、この場合は「谷間、または狭い通路」の意味合いと考えられる。「狭い通り道」という地形地名と見てよいだろう。＜高塚＞字高塚は、「高い場所にある古墳」の意である。＜戸切口＞地名としては、戸切への入り口を示した地理地名である。＜堀切＞「堀」は「壑」の同声語で、「切」は切畑山の例のように開墾地や焼畑のことを云うので、この場合は開墾した畑地と解してよいだろう。＜牛田＞字牛田は「町」の西側に隣接し、その境域が唐津街道で道筋には「町」の人家と向い合って数軒の家が建ち並んでいる。地名としては、「ウシ」が〈内〉や〈縁〉の訛りで用いられる例が多く、牛田の場合は「矢矧川の縁にある田」と解釈できる。＜原ノ下＞字原ノ下の「原」は、道路からすぐ上に広がる台地が字北原なので、その下とする地理地名と考えられる。＜牟田・下牟田＞字名の「牟田」は湿地に用いられる地名である。字下牟田は、字牟田の北に続く圃場で、牟田の下にあることでの方角地名である。＜榎坂＞字榎坂は、糠塚では最も戸数が多い枝村である。字地名の「榎」は、文字どおりニレ科の落葉高木の樹木である榎の木を指している。＜久保・野中＞字久保は、台地の上の窪地を意味する地名と考えられる。久保＝窪と同音異字を用いた例であろう。字野中は久保の東隣りに位置するが、この台地のほぼ中心部である。「野」は高台を指す場合に用いられ、「中」は中間を意味している。＜徳楽＞「徳楽」の字名は、「ある人格から受けるめぐみ、恩恵・慈悲で、とくに天子のめぐみや神仏の加護」で、「楽」は「身に苦しみがなく、安らかで楽しいこと」である。＜辻ノ上＞字辻ノ上は、徳楽の南域に東西に長く伸びた地域である。「辻」は交差路のことを言うので、枝村北原の上にある辻の位置を指したものと思われる。＜毛無ヶ尾＞「毛無し」は禿げ山のことで、「尾」は「尻や峰」を意味する地名である。＜古野・後野＞字古野の「古」は三方が高い地形で用いられ、「野」は田方に対し山地を山方と言う場合に「野の方面」と呼ぶことがあるので、ここでは「三方が高くなる山手」と言った理解が無難であろう。＜浜山＞字浜山は、三里松原に属する部分である。

## ⑥ 戸切

戸切村は、岡垣の南東端に位置し、宗像市と鞍手郡鞍手町との境域に接し、村の西端には宗像との境に戸田山を配し、その山麓の山ひだが深く村域に食い込み、その間を門前川が流れてわずかな平地を作っている。『福岡県地理全誌』にあるように、東西に一里余りも長く延びた村域は、その間に飛び飛びに枝村（櫛原・河内・畑・秋藤・岸元・三牟田など）を配置している。宗像市吉留の安ノ倉から戸切の櫛原に抜ける古道があり、宗像から遠賀・鞍手にいたる大事な通路である。明治から大正時代の村人は、この櫛原峠越えの道を吉武小学

校に通った。かつては道路の両側を樹木でおおわれた寂しい峠道も改修されて、今では宮田から国道三号線を結ぶ主要地方道 87 号線として存続している。『遠賀郡誌』には戸切の小名として、次の 23 の小名が記されている。【三牟田・外牟田・抱ノ内・藤ヶ坂・岸元・上丸・秋藤・野中・餅田・弥住・本村・白谷・男石・竜王・荒田・河原田・畑ノ前、百合野・河内・榑原・上畑・石仏・萩原】。岡垣学Ⅲを作成するにあたって、『岡垣の村里を訪ねて』（石井邦一、2016）を再整理しているが、戸切村についての詳細な地名考証がないので各小名については割愛する。



住みたい・住み続けたい  
みんなが輝く元気なまち  
岡垣



# 中部編

## ① 野間

〈尾高ヶ原〉野間のいちばん南端の山地で、最も高い山は一六六・八メートルの標高である。西を高倉の字大膳塚に接し、南は上畑の字大膳塚、堀田に接し、東は海老津の字道勢である。山また山の地形であることと、野間村の境域の南端の尻を＝尾に言い換え、原は広いことを意味するので、「村の端の高い山々が広がる地」と解釈できる。〈上葉（端）山〉自然的地名で、村の上方の端に当たる山地の意。〈長谷〉文字通り長く伸びている谷間のことである。〈小長谷〉長谷の南西に隣接する山間の小規模な狭間。〈山ノ口〉現在、海老津小学校が建っている海老津字後口の北側に隣接する谷あいの地で、この辺りにはかなり田圃が拓かれている。〈雨提〉現在、海老津駅前から公園通りへ抜ける県道二八八号線が、この地を通っている。雨提バス停があり、ここを高架道路の国道三号線バイパスも通っている。かつて無人の地だった場所が今では県道周辺に家が建て込み、マンションも建つなど激変した地域である。全体に田畠が設けられる程度の低地であるが、その北側の入り口は東西から山で間口を閉ざされている。そのため大雨の際は水の吐け場がなく、堤のように広範囲に水が溜まる現象を指した地名かと思う。〈世々町（瀬々町とも）〉全域が海老津の北側に隣接する丘陵山地で、明治四四年、郡道海老津駅一原線が開通するまでは、人も住まない不毛の地だった。この地域を象徴するものにゼゼ町溜池がある。『福岡県地理全誌』によると、この溜池は江戸時代の延宝七年（一六七九）に築立され、さらに寛延二年（一七四九）と文化六年（一八〇九）に拡張され、水面九反五畝歩・水掛田十三町を潤している。瀬は瀬川を意味するので、この山地に流れていた幾本かの細流を集めて溜池にしたことと、マチは、「ひと囲いの田地」を意味するので、この場合は「いくつもの細流がある谷間にわずかの田がある場所」と理解できる。〈石橋〉世々町にある須賀神社からすぐ西側の一帯で、国道三号線バイパスが走っている辺りで、県道海老津駅線と重複している場所である。ここには野間川が貫流していて、第二野間橋もある。この橋が石橋だったことで称された字名であろう。〈小日焼・大日焼〉野間の集落は、この小日焼と大日焼が本村とされていて人家はここに集中している。小日焼は、北に張り出した山稜を背に家々が軒を並べている。大日焼の方は野間の東側山地を大きく占めていて、人家はその中央部の西側山麓に営まれている。「日焼」の地名は、土地の地質に由来している。すなわちこの両者の地域が、地質年代に言う古第三紀層（石炭を挟在する地層）が地表に露呈した場所に相応し、表層のドン（炭層に侵入した火山岩）と呼ばれる黒ずんだ茶褐色の岩石が風化して崩壊し粘土化する困った地帯なのである。日焼とは、この赤く焼けた地肌の表現で、土地の状態をそのまま表現した自然地名である。野間団地は、字大日焼の南端にある。〈吉竹〉大日焼の本村の北西側に隣接した場所で、ここを県道海老津駅～原線が抜けている。今は道路の両側は住宅や医院が密集している場所である。地名の謂われは不明であるが、かつて竹林が多かったりで、それに因んだ瑞祥を願っての地名であろう。〈下葉山〉吉竹のすぐ東側に隣接する山地で、この山麓の傾斜地に昭和四十年代に入って葉山団地が造成された。字名については、先述の上葉山に対して「村の下（しも）の端（はた）にある山」とでも解したらよいだろうか。〈寺ヶ谷〉野間から松ヶ台へ行くバスが登り道に差し掛かってすぐ左手に小さな池が見える。これが寺ヶ谷池である。この字地は他の地に較べてごく狭く、登り詰めた上方は大日焼に接している。寺があつての寺ヶ谷と思えるが、史資料に野間の寺の記録はない。ただ、お寺ではないが仏寺としての小堂は存在していた。もし該当するとしたら、『郡誌』に所載されている大日焼の弥勒堂であろう。〈大谷〉大谷は現在の旭台一丁目西側に入り込んだ谷間で、その奥に大谷溜池がある場所である。野間川を挟んで左岸に岡垣町浄水場があり、右岸が字大橋であるが、その東に隣接してあるのが字大谷である。大日焼の山地には、幾つかの入り組んだ谷合いがあるが、その中で最も大きい谷と言うので大谷である。〈大橋〉字大橋は、大



谷の手前に野間川に沿って狭く長く伸びた地域であるが、『福岡県地理全誌』に大橋に土橋がある旨の記載があるので、それが大きい橋でなくとも「大橋」の字名となった由縁であろう。〈三本松〉同じ字名が吉木側にもあり、野間川を挟んで野間川の三本松と隣り合わせている。ここからは松ヶ台の山陵の屋根筋を辿る山道が通じている。その山道の入口には岡垣中央霊園が設けられている。三本松は、場所は不明であるがこの地のシンボルとして、大きな三本の松の木があったことで名付けられた字名と思える。〈中牟田〉野間の北端で、野間での野間川最下流に位置し、流域の両岸はすべて圃場である。牟田の地名は、湿地・泥田を言う共通の地名で、「中」は中間の土地を指すので、ここでは、「野間川の中流にある湿地帯」を言ったものであろう。〈稗田〉岡垣中学校の東側に隣接する地域で、野間川の左岸に川沿いのわずかな平地と西側は丘陵山地で占められている。稗はイネ科の一年生の作物で、往昔は救荒作物として栽培されてきたが、今では殆ど栽培されることもない。かつて、この地域で稗栽培が行われていたことを示した名残りの地名であろうか。〈北ヶ崎〉北ヶ崎の北域は、吉木の八反田と隣接し平地で田畑があるが、南域は丘陵が続いている。字名の北ヶ崎は、「崎」は「狭い」とか「先端」を意味し、北は方角なので「村の北側の先端」を示した地理地名といえよう。

## ② 高倉

〈御下〉下は高低を意味するのではなく、この場合は高倉様のお膝元の意味合いであろう。御下は高倉宮の所在地であり、御下の北西の字中村に隣接する角地には、道路沿いに家々が建ち並んでいる。〈馬場〉一般には乗馬を練習する場所であるが、地名としては広い場所のことを馬場ということがあるので、ここでは後者の意味合いだろう。乳垂川の右岸に位置し、金山の山麓の裾が緩やかに下りてきた川沿いの台地である。〈粂田〉粂は、穀物の稷（きび）のことで、さらに神に供える穀物を意味する。この場合、高倉神社に供える穀物を栽培する田の意と解する。餅の意味もあるので、この場合は「もち田」と読ませたのでと考えられる。〈関前〉「関」は、普通は関所を意味するが、ここではかつてここに設けられていた山城を意味すると思える。龍昌寺の本堂の前から登った山上に鐘楼がある。この丘陵も、この城の一画だったのではないか。城の本体は、お寺の上の山で、標高一四三メートルの場所である。〈中村〉関前とは、乳垂川を挟んで西側にある狭い地域であるが、最も人家が集中している場所である。本村の中心部であり、高倉神社のお膝もとの集落地である。〈東田〉文字どおり高倉の東部に位置する圃場の意である。高倉では、この場所から本格的な低地の田圃が広がっている。以前はこの地域の東部は小高い丘陵で西部域が田圃であったが、昭和五十年七月にこの山地に果樹園を造成するため、ここに存在する古墳群の緊急発掘調査が、県教委によって実施された。〈松原口〉字中村の西側に隣接する地域で、松原と云うのは三里松原のことで、川沿いの道路がここからほぼ真っ直ぐに吉木濱に通じていることから、松原への出口ということだろうか。〈相園〉ここまで人家が延びているが、人家は中村と松原口に接した南東域に少しあるだけで大部分は圃場である。「相」は河床の低地などを意味するので、乳垂川の右岸であるこの地域は低地なので、土手が設けてある。「園」は主作物以外の畠が多い地の意味があり、相園は低地の畠作地とした意味合いと思える。〈百合野〉「百合」は山地の小平坦地を指し、「野」は広い平地を意味するので、山地の広い平坦地と解してよいだろう。実際に百合野は、大山口から流れ込む谷川と金山の山麓から流入する谷川が、この地域の西端と東端に流れていて、その間が田畑として拓かれている。〈大山口〉孔大寺山の直下、高倉村の西端に位置する枝村である。明治初頭には二十戸が記録されているが、今日もさほど増減のない集落で、ここを水源とする谷川に沿って家々が建ち並んでいる。字名については、大山、すなわち孔大寺山への入り口の意である。〈宮ノ前〉この場所は文字どおり高倉神社の鳥居前周辺を指すこと以外には考えられず、位置地名である。したがって、字御下の範囲内であろう。〈猿田〉地図上では、高倉村の南域の山地を広く占めているが、こと地名の「サル」は、「ザレ」と同意語で崖崩れなどを意味する。〈金久曾・金山口〉金山は北岳（三〇八メートル）と南岳の二峰からなっているが、この北側の直下が字金久曾である。全域が山地であるが、この地の谷合いには明治時代までには住家が二戸あって人が暮らしていた。字名の「金クソ」は往昔、この地で金が採掘され、それを精錬した後の鉞

滓（精錬した後に生じる滓）の意である。金山・金山口も、金久曾の南側に隣接する金山の北岳と南岳の稜線直下の字地である。何れの地も全域が山地である。金山は金が採れる山。金山口は、金山の出入口の意味であり、何れも金の採掘に関わる事物地名である。〈落合〉字百合野の東に隣接する字地で、金山を水源とする谷川と、大門口川が交わる合流点の間の狭い地域である。ここには人家が数軒所在する。〈鍋倉〉「ナベ」は、(①滑らかな・鍋形②岩・断崖・谷) に用いられる地名である。現地は東西にかなり入り組んだ谷が中央にあって、その両側が山地なので、その地形を鍋底状になぞらえた字名であろう。〈岩ヶ鼻〉この字地は、字鍋倉の東に隣接していて大門口に通じる道路があり、北域はすぐ急峻な山地である。道路端には家が数戸ある。岩は山を意味しているので山の端、すなわち、「山の鼻先」であることを示した地形指名であろう。〈門司口〉同じ字名が上畑村にもある。かつて宗像・遠賀西郷を支配した宗像氏貞の居城葛ヶ岳城が高倉・上畑両村のすぐ南にあり、この兵糧を運ぶ通路が城の北側に設けられていた。この道は馬がようやく通れるほどの山道だったが、この入り口を門司口と称していた。門司の方向からと云った方角地名であろう。〈井堀〉「井」の転語は、向井ともなり境を意味する。「堀」は窪みの意があるので、「村境の丘陵の窪み」と言った意味合いと捉えたい。〈裏田〉今は埋め立てられていないが、野間村の長沼溜池に隣接する一画で、かつては野間に流れる源十郎川の源流が流れていた谷あいには三戸ばかりの人家もあったが、わずかの田や池・丘陵はすべて宅地造成で均されて、現在、地域はふれあい公園通りの住宅団地に一変している。〈杭田・地原・地久〉裏田の南域に隣接し合う字地である。まず「杭田」であるが、ここは裏田の谷に続く低地と小川がある狭い地域である。「杭」は〈クイ〉で、地中に打ち込む棒であり、「田」は田圃そのものだとすると、直訳すれば「杭を打ち込む田圃」と言うことになる。地図で見ても、杭田の字地は南北に細長く伸びた場所で、西側は字御下の山麓で、ここ辺りから源十郎川の流れが本格的に始まろうかと云う位置である。この周辺の山から湧き出す地下水などの関係で、ここに設けられた圃場は湿田だと思える。そのため雨期などは水はけが必要になり、この溢れる水流が田圃に流入するのを防ぐ手段として杭が用いられた。したがって「杭を必要とする田地」を意味した土地の状況地名ではなかろうか。「地原」も、杭田の上部に続く圃場のある谷合いの低地と山地から形成されているので、文字通り原はバルの読みで原野の意で、谷間の開墾地名ではと考えられる。「地久」は、かなり広域の字地であるが、源十郎川の流域をわずかに含んでいるが、八割方は山地である。「久」は（長く続く）の意で、山地が長く広く広がっている様を示したものと考ええる。〈小峠〉手許の字図には載っていない字である。字地の可能性があるのは、字金山口から上畑の山峠に抜ける場所だけである。「ちょっとした峠」といった字名である。〈中縄手〉高倉の北端にある土地で、東からの丘陵台地がここで途切れ、西側は石川沿いの平地が広く広がる場所である。丘陵部域はふれあい公園通りの住宅団地になっているが、ここには中縄手古墳群が遺構としてあったが、団地開発の折りに発掘調査が行われ、丘陵上に四基の古墳が確認された。字名としての中縄手は、「縄手」は集落間の空間また距離を意味するので、「隣接する吉木村との中間にある地」と言った地理地名であろう。〈大膳塚〉高倉村の南東部に、海老津村の尾高原と上畑村の同じ字名である大膳塚とに隣接する山地である。字名の大膳塚については、『筑前國統風土記拾遺』に「赤間に越る峠に在。昔塚在。伊賀彦の末葉也しと云。今は塚なし。」とある。〈花木・合ノ元〉字花木は高倉村の北端で、「木」は山林を意味するので、村境の林野と云った意味合いであろうか。字合ノ元は、花木の東に隣接し吉木村と境している。「合ノ元」は、此处で吉木からの道路と石川（汐入川）とが合体して高倉村に入る始めの大本と言った、語意ではないだろうか。〈立田〉字立田は高倉村の北端に、三吉村と接する村境の山地と圃場がある場所である。西側の半分の強さは山林で占め、あとは石川沿いの平地が田圃である。字名の「立」は高いところを意味し、「田」は田圃を指すので、山と田圃が拓けてい

る場所の意である。



ようこそ  
岡垣町へ!

### ③ 吉木

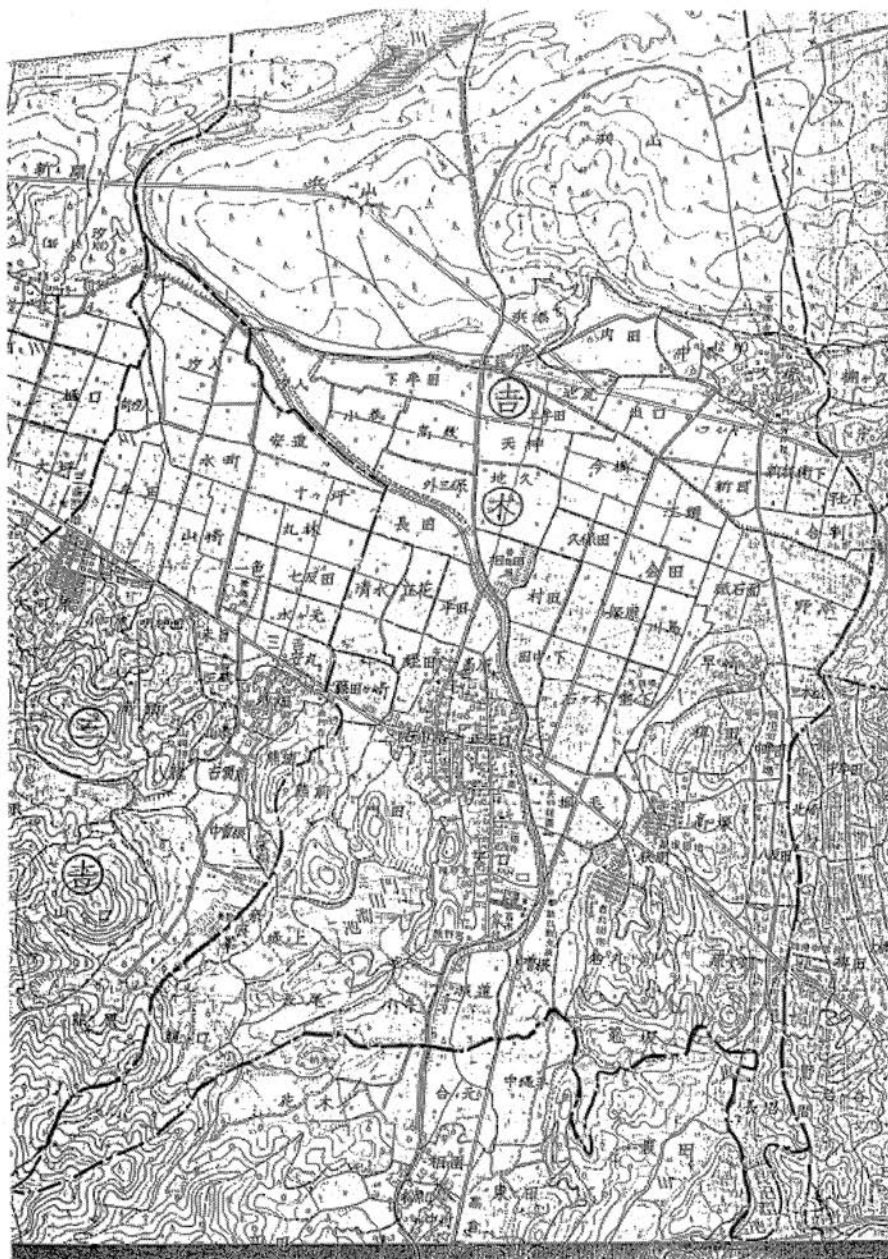
〈三本松〉この地は吉木の東域で、黒山村・野間村との接点に当たる地で、ここから現在の松ヶ台団地へ抜ける山道がある。三本松からはすぐに松ヶ台丘陵台地となり、その手前の平地（圃場）が三本松である。今はない大きな三本の松があったと伝えられている。これが字地名となった。〈野添〉三本松の北側にあり、田圃地であるがこの地のすぐ東は黒山村の山地である。野添の字地名は、素直に山地に対して「野の側」、或いは「野の側」の意である。〈砥石面〉砥石面は南側を枝郷の字早崎に隣接し、早崎の丘陵台地が北へ張り出した先端の部分に面している。「砥石」は、古墳の上石を大きい砥石に見立てて祀り、「面」は年貢を免除された地の意であろう。〈早崎〉戸数は明治期で九戸と少ないが、この地の家々は全戸が麻生氏を名乗っている。地名としては「早＝ソフ＝添う」で「崎＝先」で、「台地の先端部」を意味したものと考える。〈稗田〉早崎の南に隣接する丘陵地で、その西端には源十郎川が流れている。「稗」は、崖や削り取られた地形を言う場合がある。「田」の場合は、位置を示す「端（ハタ）・辺（ヘタ）・処（ト）」と同義で、場所を示すものと考えられる。現地の地形から見ると、道路などで「取り削られた処」と言うのが適切であろう。〈中牟田〉「中」は山と山の間に挟まれた状態を言い、「牟田」は湿地を言うので「山に挟まれた湿地帯」と言うのであろう。〈高塚〉高塚団地がある場所である。単純な解釈だと、「高所」を示しているが、この場合は「大きく土盛りした古墳がある所」とも考えられる。〈八反田〉高塚の東側にあり、その東域は野間村に隣接している。「八反田」の地名は、文字通りその「田圃地が八反歩ある」ことの圃場地名であろう。〈源十郎〉字源十郎の東域は、野間村字稗田と境を接しているが、この境域に岡垣町役場が所在している。源十郎の地名は人名であるが、それがこの土地の持ち主か、あるいは開発者の何れかであろう。〈長沼〉吉木の最南端で、高倉側に突き出した山地である。「長沼」の地名は、かつてここにあった長沼溜池の形状が長い池だったことからきている。〈菟坂〉高倉村との境にある山地である。菟坂の地名は、「菟＝ト・ウサギ」は「ウサ」の転化が「塞＝フサ」で「塞がれた地」となり、「サカ」は急傾斜している地形なので、「急傾斜の丘陵で閉ざされた地」となる。〈倉丸〉菟坂の北隣の山地。「倉＝クラ」は「座・場所」を指し、「丸＝マル」は「台地の張り出した先端」を言うので、「台地の先端部分」の意であろう。〈狭間〉高塚と倉丸の台地に挟まれた谷地で、ここを県道の原～海老津線が走っている。一般に「谷間」を言う地形地名である。〈堂ノ下〉吉木から早崎に入る道路脇の圃場地で、お堂があったことでこの地名がついたものであろう。「堂ノ下」とあるので、お堂はここから早崎に通じる坂道の途中にあったと思える。〈川島〉字川島は、堂ノ下の北側に続く田圃で、早崎の丘陵の真下に位置している。「川」は「湧き水」が出る場所を言い、「島」は「ひとつづきの広い田地」を言う場合もあるので、「湧き水の出る広い田圃」と受け止められる。〈塚原〉吉木の田地の、まったく中の位置である。本来、「塚」は土を盛り上げて高くなった場所を言うが、水田地とあってはこの見解は成立しない。動詞の「ツク＝浸」と「原」の「広い場所」に通じた、「水に浸かりやすい場所」と解すべきであろう。〈会田〉塚原の北側に隣接する田地。地名としては「開田」の転化と思われる。田地でなかった場所を「田圃として開いた地」ではなかろうか。〈江頭〉「江」は小川を意味し、「頭」は水源を言うので、「小川の源」と解される。〈今橋〉「今」は「新しい」意で、「橋」は「端」を意味する。この田地は元松原に近い。明治時代には元松原は吉木に新松原は手野に統合された。したがって「今」の「新しい」は、「新しい元松原の端」とした地理地名と考えられる。〈上牟田〉什王堂を流れる、源十郎川に添った田地である。「牟田」は「湿地・沼田」を言うので、これは「沼田の上の場所」であろう。〈天神〉この場所は田地のまったく中である。「天」を「ア（水）マ（間）」と読み替えば、「湿地」になる。「神」は「カミ＝上」となり、「上の湿地」の意となる。〈地久〉と〈相田〉〈村田〉〈田中ノ下〉の字地は、いずれも汐入川の右岸に隣接して存在している。「地久」は、縁を「チ」と読ませる例が多く、「久」は「古・元」の意とすれば、「元の川縁」となる。「相田」は、「あいのた」の読みで「川の跡が水田になった場所」となる。「村田」は、ムラ（班）と関連し「凸凹の多い土地」を言う。「田中ノ下」は、「田に囲まれた下の方」と解せる。〈久保田〉一般的には「久保」は「周囲より低い窪んだ所」を指す。「田」は「場所」を示すので、「周りより低い場所」の意であろう。〈石ヶ本〉「石」は「石が多い地」。「本」は「地面・所」を意味



するので、この場合は「石の多いところ」と解してよいだろう。〈堀毛〉「堀」は、かつて岡城があった当時は、石川が城の外堀の役を果たしたことに発し、「毛」は「コ=処」の転で場所を示す接尾語と考えられる。〈中曽根〉「中曽根」は吉木村の南端の位置で、隣村である野間村と三吉村間のほぼ中間部にあり、南を高倉村に接している。「曾根」地名は、「石が多く地味のやせた土地」の意である。であれば「石が多く両側の山地に挟まれた間の地」となる。〈深道〉「深道」は「神道」で、ここには高倉神社の芦屋渡御の際の御下り道だったことによる地名である。〈小寺〉深道の西に隣接し、高倉村との境にある地である。「小=オ」は山裾の端を言い、「寺」は「タヒラ」の転で、緩傾斜地を言う。したがって、「小寺」は「山裾の緩やかな傾斜地」となる。〈長尾〉「長」は山地長く延びた地形を指し、「ヲ=尾」は「山の背」で、「山陵が長く続いている」様子を言ったもの。〈堤ノ上〉門田溜池の南真上にあり、文字通り「堤ノ上」である。〈龍ノ口〉「タツ」は高い台地で、「ノ」は助詞、「クチ」は「縁・端」の意で、「高い山の台地の縁」を言ったものである。〈奈良峯〉門田堤の西側にあり、三吉との境域でもある。「ナラ=奈良」は、「山間の小平地または緩傾斜地」を意味し、「峯」は「山の尾根筋」を言うので、「山の尾根が緩やかに傾斜し平地もある地」の解釈でよいだろう。〈熊ノ前〉三吉の熊山の東側斜面と吉木の岡城址がある山地に挟まれた谷で、わずかながら田圃も拓かれている。地名は地形そのもので、「熊山の前の土地」である。〈門田〉場所は、門田溜池とその北側の谷間で、城主麻生氏の屋敷もあった。「屋敷の正面にある田圃」と解すべきであろう。〈矢口〉岡城址の、東側の真下に家並みが広がる居住地である。「矢口」の地名は、岡城から放たれた「矢の届く端」の意であろう。〈古小路〉文字通り、「従来からの古い小路」で、かつて城下町当時の小路が、この地域を抜けている場所である。〈正矢口〉字矢口の北側に隣接し、「正矢口」は本来の矢口の場所を示唆した地名であろう。〈高原〉正矢口の北に隣接し、人家は数戸あるも東域には汐入川が流れる田地である。〈平田〉字高原の西に隣接し、汐入川の左岸にある田地である。地名は、「川の堤防がある平な圃場」の意であろう。〈立花〉「立花」は、瑞祥地名の例が多いが、この場合は「タチ」の転化で「縦になった田地」を言ったものと考えられる。「花」は一種の美称であろう。〈蛭田〉現地は、古小路の北側に隣接する田地。「ヒル」は低湿地を言うので、「湿地の田圃」と見てよいだろう。〈藤田ヶ崎〉西を三吉村に接する村境の田圃地。「藤=フジ」は「縁=フチ」の濁音化で、「田」は水田、「崎」は山丘の先端を言う。この地が熊山の先端部にあるので「村の縁で山丘の先端にかかる田地」と解せるのではなかろうか。〈清水〉藤田ヶ崎の北側に隣接し、西は三吉村水ヶ元に境する田地。地名は、この地に湧泉が出ることを言ったものであろう。〈長田〉字清水の北にあり、汐入川の左岸に位置する田地。川の湾曲した場所に沿って、東西に「長く延びた田地」そのままを字名とした、地形地名と言える。〈外三保〉字長田とは汐入川を挟んだ西側の田地。地名としては、「外=ソ・ト(処)」と「三保=ミ(接頭語)ホ(秀・穂)」で「先端が尖って突き出た所」の意となる。〈高幾〉字外三保の、北に隣接する田地である。「高」の地名は、一般的には「高いところ」を言うが、現地は田圃で低地である。だが「高」には「田地」に意味もある。「幾」は、動詞「ウク(浮)」は「湿地で柔軟な田地」の意としたい。〈小巻〉字外三保および字高幾の西域に接し、西南側には汐入川の下流部が流れている場所。「小」は接続語の「処」で、「巻」は「川で取り巻かれた」とすれば、「川に巻かれた処」と解せる。〈汐入〉字汐入は、汐入川の最下流部にある。「汐入」の字義は、「大潮の満潮時に海水が入ってくる所」である。〈下牟田〉字小牧の北側に位置し北側を源十郎川が流れている。湿地・沼地を意味する用語であり、場所が下にあるため「下牟田」となる。〈浜山〉字浜山は、三里松原の吉木村域の全体で、かなり広範な地域である。最西域の砂丘は吉木村の墓地になっている。〈浜添〉源十郎の右岸に沿って、什王堂の集落がある場所。地名の「浜添」は、その先に開ける海浜に沿った場所の意である。通称「吉木浜」である。〈池ノ尻〉野間川(源十郎川)に沿い、「浜添」の西に隣接した地である。「イケ」は(井セキ)の略で、「井堰」を意味し、「尻」は「後」の意で「後方・背後」を意味する。だから「井堰の後」のことである。〈出口〉ここも野間川の右岸の地で「井出口」の略称と思われるが、地名の意は、「田の用水の取り入れ口」のことである。〈ユルギ〉字出口の西に隣接し、元松原の集落への入り口である。カナ地名は珍しいが、地名としては「揺ギ」で「地盤が緩い緩傾斜地」のことである。〈新貝〉字ユルギの南側に所在する田地である。

「新開」と同義で「新開地」のことである。〈会割〉野間川と合流する塚田川が、この地の中心部を東から西方に流れている。東端は山が迫っている。この山と平地が相対応する地形の関係を、「割れた区分」として言ったものだろう。〈宇土ノ下〉東隣りは黒山村の字宇土である。「宇土」は、両側が高く切り込んだ谷や道を言う。この黒山村字宇土の西隣りに位置することから「宇土ノ下」になった。「下」は「低い方」を意味している。〈久保〉元松原の集落がある場所である。「久保」は「周囲より低く窪んだ所」の意であるが、ここには松原村当時の氏神須賀神社をはじめ古刹の松原山安楽院極楽寺もあり、字中添から久保にかけては弥生時代当時の遺跡もあり、集落の古さを物語っている。〈中添〉字久保の西に隣接し、人家も結構ある地域である。地名の意味は、「字内田と久保に挟まれた松原の側」を通じるのではなかろうか。〈内田〉字内田は、字浜添とともに浜山である三里松原に食い込んだ場所。「内」は浜山に一番入り組んだ内陸部の縁の意で、「田」は水田ではなく場所を示す「ハタ（端）・ヘタ（辺）」などの、方向や場所を意味している。したがって「浜山に入り組んだ縁」と言える。〈新兵衛下〉「新兵衛」は人名であるので、それが誰であるかは不明である。昔の芦屋道は「新兵衛下」の浜山の張り出しを避けて、これを南側へ迂回する道筋だった。新兵衛の家はこの浜山の突端にあり、家の下が道路だったことでの地名となったと考えられる。

吉木の小字図





#### ④ 松原

〈松原〉の語源は、「松が多く生えている原」と三里松原の内縁部にある村落そのものの村名である。『遠賀郡誌』には、「此里は吉木村の内なりしが慶安二年（一六四九）己丑（正保四年ともいふ）別れたり、岡の松原の内にあるをもって此名あり」とあり、小字地名は吉木に包括されている。また新松原の場合も、手野の小字地名に包括されているため、その区分が判然としないので、小字地名の考察について割愛する。元松原居住地の周辺字地名〔久保・中添・内田・浜山・・・・〕、新松原居住地の周辺字地名〔汐入・新開・稲葉・龍毛・樋口・餅田・・・・〕について、この字地名の分だけを、地名考として取り上げて見ると〈久保〉窪地。〈内田〉松林の縁の田。〈浜山〉砂浜の丘陵。〈中添〉浜山の中間の土地。〈汐入〉海水が侵入する土地。〈餅田〉平坦地の田圃。〈樋口〉用水の取り入れ口・または吐け口。〈稲葉〉イナは砂のことを意味するも、ここで稲干し場の意か。〈龍毛〉龍王は雨乞いの水神として崇められている。「ヶ」は稲の実りを意味するので、豊作への願いを託す地名か。

#### ⑤ 三吉

三吉村は近世になって誕生した新村なので、往古から伝わったような古い地名ではないだろう。おそらく中世までは入り海の名残が、平地の浜辺には葦（よし）生い茂っていただろうことは容易に推測される。したがって「吉」は「蘆」に通じるもので、「三」は「御」で「御蘆」=「三吉」と同音の表記になったのではないだろうか。こうした二文字地名は、和銅六年（七一三）に勅令で郷里名を「好字で二文字の表記とする」ことが義務付けられた。この地方も「崗」だった郷名が「遠賀」となったのは、その例である。三吉の小字地名は『遠賀郡誌』によると次のとおりである。《安藤・汐入・向汐入・水町・丁ヶ坪・丸林・一色・七反田・水ヶ坪・安丸・末旨・山崎・牟田・大河原・小河原・明神面・浦頭・三蔵・山添・古賀前・外畑・熊浦・三本松・中曾根・八滝・三吉原・山ノ口・熊原》以上、二十八の小名から成っている。〈安道〉「ヤ」は沼地であり、「ス」=州で「ヤス」は沼地を指し、「ドー」は川の合流点や、水門のある場所を意味する。現地の汐入川の河口に近い田圃地なので、田に水を導く水門が構えられていたのではなかろうか。土地の形状地名である。〈汐入〉これも汐入川に沿った圃場で、河口に近いだけに満潮で海水が流れ込むのに容易な場所である。〈向汐入〉字汐入の向かい側、すなわち西側に隣接する圃場である。「字汐入の向かい側」という位置地名である。〈水町〉「水」は水の「流れ」や「潤う・しみ込む」を表意し、「町」は「田の間の道や境・畦道」を意味するので「湿田のあぜ道」ではないか。〈丁ヶ坪〉丁は町で、一町ほどの広さがある「坪」=平地のこと〈丸株〉丸=「真っ直ぐ」の田が、「林」=集まる意味。〈一色〉「一」と「色」を解釈すると、山裾がきれいな穏やかな場所を意味する。〈七反田〉田が七反あるとする、場所地名である。〈水ヶ元〉山から湧水が染み出る場所だろうか。〈安丸〉「安」は沼地を意味し、「丸」は川道と街道の接点にみられる地名である。したがって、「川と道路が交わる沼地」の意味か。現在は、県道沿いに、かなりの家々が建っている。〈末旨〉「末」は「端」の意で、「旨」=棟で、村の最も端にある集落の意であろうか。〈山崎〉「崎」は、「挟間」か「先端」の意で、この場合は「山の先端域の不安定な岬」と考えたい。〈牟田〉牟田は湿地・泥田のことを言う。現地は県道原・海老津線の北側に沿った田圃地である。〈大河原・小河原〉現地は、県道原・海老津線を間に挟んで、隣り合わせに在り、字牟田の西に隣接する地域である。県道沿いには県営住宅団地や町営住宅が建ち並ぶ住宅密集地である。これらの住宅地の南域はすぐ山地が追っている。小河原には明神を祀る天神社がある。「河原」地名は、礫地を意味している。したがって、この字名は孔大寺山系の山麓を形成する山裾の、礫岩地帯を意味したものである。〈明神面〉明神面は『延喜式』にある靈験あらたかな神であるが、面は免に通じていて、この地がかつては明神様の祭料地として、貢祖を免じられていたことを意味している。さらに、高倉神社を祭った伊賀彦が、御炊飯の井戸のほとりで「みけ」（神に供える食物）・「みき」（神に供える酒）を整えた場所が、この明神面の地とされている。現在、安川団地が拓かれた場所である。〈浦頭〉浦は、入江や先端、畑



を意味するが、地理的に見ると、ここが入り海に突き出た山の先端部にあたる。頭＝カシラは山そのものを意味するのでここでは「内海に突き出た山」と解しておこう。〈三蔵〉かつて三吉で聞き取り調査をしていた折に、熊原川の側のお家で、「昔は、この家の側まで海が来ていて、ここに三艘の船をつないでいたので三艘と言ったが、それが訛って三蔵になった」と聞かされた。〈山添〉文字通り山に沿った地の意であり山崎神社の入り口である。三吉の集落の最も奥まった場所と言える。〈古賀前〉コガ＝は空地または村内の小区画を言うが、この場合は「空き地の前」と言えるのではなかろうか。〈外畑〉三吉の集落が最も密集している場所であり、県道からの入り口でもある。「畑」は「端・傍」に通じるので集落の端から外部に通じる場所と言ったところであろうか。この地の中心部に、かつての洞源寺跡などがある。〈熊浦〉南北に流れる熊山の稜線が境界で、熊山の東側山麓とその下部のわずかな平地が熊浦である。東は吉木村の字熊前である。字名の熊浦は、もちろん岡縣主祖熊鰐に因んでいる。熊山の山頂には、明治十五年（一八八二）に、当時、吉木に居住していた旧福岡藩士で儒者でもあった海妻甘蔵の筆になる「岡縣主熊鰐公」碑が建てられている。熊浦からは、西園寺の横から熊山の鞍部を抜けて本村に通じる山道がある。地名としては、この熊鰐の所縁があるこの地まで浦、すなわち入り江だったことを示した伝承地名と言えよう。〈三本松〉現地は熊浦の南側に位置する狭小な山地である。この地名を象徴する古松が三本あったことから現象地名であろう。〈中曾根〉「曾根」地名は局地的に砂地であるか、岩石の多い痩せ地を指すがこの点は現地で確認できていないため何とも言えない。三吉に採石場があるのも、この奥地である。〈八滝〉三吉の氏神、山崎神社がある場所である。大正二年三月に明神面にあった山崎神社が、この地に移された。八龍の謂われは判らないが、『三国志』に「昔～聖哲茂姿を似て、龍飛して天に応ず。四海頸を延き、八方目を拭う。成・康の化を以って、必ず旦夕に隆んならしめん。」あたりから援用と思う。〈三吉原〉三吉の南西部で最も奥になる山地である。「原」は広いという意味で用いられるので、「三吉の広い山地」と言うのが、最も実態に即した意味合いだろう。〈山ノ口〉単純に山への入り口と解しておこう。〈熊原〉三吉の南東部に、吉木と境を接する山地である。三吉村を南北に縦貫する道路が、この地域を山ノ口まで続いている。この吉木と境界を巡っている山陵は奈良傘と呼ばれている。「奈良」は「緩やかな傾斜地」の意味で用いられているので、山地でもさして高くもない熊山に続いた土地と解釈してよいだろう。



# 西部編

## ① 手野

<藪口>低木や竹などが生い茂る縁を表す。<森>「守」で神聖名所の意味があり、手野の氏神大国主神社の所有地でもある。ただ、この神社の所有地は『遠賀郡誌』に、字山ノ口一八〇六とあって違いがある。これは「村の字に大黒兔があり、神田があった」とされているので、これが字名整理と神社移転等で現在の状況に変化したと考えられる。<山ノ口>山の手前を指す。<道留>手野の西域で内浦村との境に近い山域で、これは文字通り通路の行き止まりを言った地名だろう。<黍田>一般的には黍はヒビの転で「割れ目」を言うので、地形的にけわしく狭隘な場所の田と解したい。<大井>大きな井戸を意味する。<小堀>須藤駿河守の屋敷跡にまつわる地名。ここでは屋敷の外壁があった場所とする。<青崎>青は死者の埋葬地にもよくつけられる。崎は平均を欠き傾斜した山や山道のことである。<薬師>内浦村との境に接している。『筑前国属風土記拾遺』に、「薬師堂=やくし谷に在り・・・」とあるが、この地だろうか。<中島>薬師と同じく内浦村に接する中島は、位置からは山地なのに何で島なのかと思うが、シマ(締・占)は低湿地に囲まれた、島状の微高地を意味するので、「二つの高地に挟まれた処」という土地の形状地名である。<室面>山麓地名=「室面」は内浦村境であるが、室は森に、面は方面を意味し、「森がある辺り」と解せる。ここには内浦に通じる道もあり途中の森の中には墓地もある。<生力>生=鈍で緩傾斜地。力=チ・キの転音で処と読み、「緩やかな傾斜地」である。<中園>屋敷地名であり、庭園があった場所である。<垣ノ内>垣=屋敷・庭園を意味するので、この場合屋敷地と見てよいだろう。<裏門>文字どおり屋敷の裏門があった場所。<片山>山麓地名=「片山」は、一四五・一メートルの円錐形の山で、手野のほぼ中央部を通る県道二八八号線からは、道路の南側にすぐ見ることができ、山の名称と同じく、字名も山頂から西の山麓一帯が片山である。地名としての片山は、「山の片側」の意味であろう。<河原>屋敷地名ではないが、人家がもっとも集中する本村である。<松尾>久世原と通称される片山の西側山麓の鞍部にあり、人家も十数戸を数える。「松」は一般的に縁起の良い語として用いられ、「尾」は山裾の末端を言うので、この場合は「目出度い山裾の地」と言ったところだろう。ここには、道満様の墓所と言われる石室(古墳)もあり、古くから毘沙門堂も手厚く祀られている。<狩野>狩は動物を柙の中に追い込んでにげられないようにすること。野は横に伸びた広い田畑のことである。つまり、広い田畑で狩猟を行っていたと考えられる。<雪仙>雪は節・切に通じ、仙は狭い間を意味する急傾斜地の崩壊地名と考えられる。雪仙には、古くからの地藏堂や薬師堂もあり大事にされた。<招キ>須藤駿河守にまつわる長者伝承に基づいたもので、「手野の道満様は手野の前千町、後千町もの田園持ちで、田植えも終わろうかというとき、浜山の稲葉ん所に、馬の上に猿が乗って通りよるのを発見して田植えん衆がみんな田植えの手を休めて見とれてしもうた。そのうちにお日様も下りてしまう始末だったが、そんなとき道満様が田園の上の招キの鼻に登って、手にした扇子で沈もうとするお日様を‘揚がれ揚がれ’と煽がっしやったら、沈みよったお日様がまた上がり、無事、全部の田植えが終わったげな」と言うもので、以上、要約して民話を紹介した。手野では、この伝承民話に因んで、ここを太陽を招き返した「招きが鼻」と称している。現地は片山の山麓が岬状に延びた丘陵の先端であるが、その先端部分は明治末に郡道海老津～原線が着工されたとき削られて、今はない。<磯原>海浜に接した岩石の多い波打ち際と解す。<東坂・山下>片山の南側斜面には、五世紀から七世紀頃までの古墳が百基近く確認されていて、字磯原から東坂までの山麓一帯の古墳を含めて、大規模の古墳群を形成している。この片山の周辺を、東側に字東坂があり、山の北側斜面に字山下・磯原・雪仙が取り囲んである。<大坪>大きく区切られた田圃の意であろう。<篠間>「篠」は湿地を指す語であり、「間」は空間や沼を示すので



沼がある場所によいだろう。＜大黒面＞手野の氏神である大国主神を祀るため、年貢を免除された田である。＜土田＞土=辻の転字で集落の入り口の辻にある田圃とした意か。＜河原口＞河原の集落の入口の意である。＜前田＞前は広く前進する。前方などの意に用いる。田は平らに伸びる意を含む。つまり、田を広く開拓していたと考えられる。＜藪石＞低木・竹などが茂り、石の多い所と解する。何それも平地との接点にある。＜的浦＞「的」は狭い小平地で裏は「内部、奥、うち」を意味するので、手野の内部にある狭い広場と解すべきだろう。＜沖＞は田・野良を意味し、海寄りのところ・干拓地も意味する地名であるが、現地は海よりの場所で田地なので双方の意味を通わせたものと考え。＜片貝＞一方が砂丘で入り海を隔てた対岸が平地のところ、とする見解もある。＜月ノ田＞月=突くで埋立地を言うので、埋立地の田圃の意であろうか。＜津瀬＞津は港や渡し場のことで、瀬は狭い場所を指すので、かつて入り海だった頃、砂丘との間の海が挟まった場所で港もあった場所であろう。＜江月＞江は湿地や用水路を指し、月は築の転字で埋立地を言うので、湿地を埋め立てた地ではないだろうか。＜長沼＞長く伸びた地形の沼地だった場所。＜樋口＞新松原に属する場所で、内浦から流れ出る海蔵寺川が、汐入川と合流する地点の手前にある。樋口は田圃の用水の取り入れ口、または放出口を指す地名である。＜餅田＞宮持田をいうこともあるが、この場合単純に「餅米を作る田」ではないだろうか。＜黒渡＞ある物全体が黒くなるという意味があることから、一面が黒くなっていたことが解される。＜松本＞眞土=粘土と解し、本=所の意で粘土のある場所ではないだろうか。この三里松原砂丘には鳥栖ローマ層が顕在しているので、その露頭がある所であろう。＜梅津＞海とは関係なく、砂などで埋もれているが、水のある湿地があることを意味する。＜波須＞コイ科の淡水魚の名前であるので、波須が関係していると解する。＜浜田＞海岸や河岸と田だけでなく堤や急斜面のふちにできた田も意味する。このことから、急斜面の田が存在することが解される。＜龍毛＞龍=タチ・タテの転で、高くなった所を言い、毛=場所を示す接続語なので、「砂丘が少し高くなった場所」の意であろう。あえて「龍」としたのは海岸なので海水を意識してだろう。＜稲場＞稲=砂地を意味するので、この場合砂の多い場所であろう。現地は、遠賀病院（現おかがき病院）がある場所である。＜新開＞海浜砂丘地名である。＜汐入＞海岸地名である。＜城ヶ原＞山地地名であり、かつての雨乞山城の山腹を意味している。＜長者原＞道満様の長者伝承による地名であるとともに、異なる山系に挟まれた谷間の侵食地形を指している。＜清崎＞清は狭い、山中の谷間を意味し、崎は狭間や山丘の先端などを意味するので、山中の谷合いと言った地形地名であろう。＜梶原＞カジ=カジルで崖などの崩壊地名に使われるので、この場合は砂丘が波の侵食で、崩れやすい場所として用いられた地名と思われる。＜渡＞海への徒渉点、すなわち海岸に出る場所であろう。＜的浦＞的は狭い小平地で浦は先端や下方を意味するので、手野の下にある狭い広場と解すべきだろう。

## ② 内浦

遠賀郡誌には、内浦にある四十六の小字地名が書いてある。まず、村の南西域で湯川山直下の山地の小字名から拾って見ることにする。＜西方＞は、湯川山の尾根が郡境であるが、その尾根の直下を東西に幅広く占め、小字では最も広い面積を有する地域である。＜岩谷＞は、かなり標高もあり、山を峻しく、その北端の溪谷には海蔵寺瀧もある。岩谷は「断崖がある山と山の間」の意であろう。＜庵ノ尾＞は、西方の北山麓の位置にある。成田山の真上の山地である。＜楡ノ木＞は、山の斜面が緩やかな山地であろう。＜古杉＞は、「山が崩れて通路になった場所」と捉えたい。ここには垂見峠がある場所で、郡境でもある。＜峠＞は、「古杉」の東にくつついた狭い字地で峠道の下部を意味する。＜行重＞は、おそらく、手野の長者だった須藤駿画河守行重に因んだ地名と思われる。山地の字地としては西域に＜加老＞がある。これは地域の両側が絶壁になっている地形を示している。加老の東隣りにあるのが＜水頭＞である。水源地を意味した字名である。また「水頭」のすぐ真下に、字＜海蔵寺＞がある。ここに海蔵寺があり県指定文化財になっている。字名はそのまま寺の名前である。＜空徳＞は「海蔵寺」の東隣りの地である。かなり高地であるが内浦の枝村海蔵寺の民家が点在する場所



である。この「空徳」の東に隣接する。＜柿山＞も成田山への林道の縁にある山地である。またその柿山のさらに東域に隣接するのが＜大谷＞である。字名としては、文字通り「大きな谷あい」とする地形地名である。＜小路ヶ浦＞は、「山の峰の下方」という地形地名であろう。＜貴船谷＞は手野村境に南北に長く横たわる山地である。＜草場＞は、原村の字草場と背中合わせにあり、そんなに高くはないが、まだ山の先端が張り出した場所である。山地の小名を終わり、次いで平地に近い山麓部の字を辿ってみよう。まず＜芝原＞である。場所は垂見峠への登り口にあたり、「焼畑がある山腹」と解したい。＜榎田＞は「芝原」の西隣にある。地名は「周辺に榎が植わっている田地」と言ったものではなかろうか。＜平山＞は、内浦の枝村で十戸以上の集落がある地である。『筑前國続風土記』に書いてある〔猿楽の亀石太夫と亀石のこと〕の亀石氏が亀石姓を名乗った起源となるのが亀石である。内浦小学校の校門側にあるのが、この「亀石」である。＜河原田＞は、「平山」への入り口に当たる場所である。小石の多い土地の意である。＜毛地＞は、「河原田」の北側に隣接する圃場である。字義としては「田の脇にあるわずかな林、または森」と受け止めたい。＜帯田＞は、「細長く続く山裾の田」の意味ではなかろうか。＜和田＞は、地名としては、「山裾が広く湾曲してやや広い平地」になっている地形である。国境を挟んで、「和田」の東側にあるのが＜神ノ前＞である。この字の「神」は神＝紙で、この地の奥地になる枝郷の海蔵寺で、楮を栽培し紙を漉き半紙などを生産していたことに因んだ地名であろう。＜新聞＞は、開墾地の地名である。＜大間＞は字新開の東側で、字新開と手野との間をつなぐ場所の意であろう。＜白毛＞は、小字図では「白丸」になっているが、ここでは「白毛」で通したい。「白＝塩」で「毛＝場所・様子」を意味することから塩分の多い地ではなかろうか。＜手野田＞は、理由は不明だが手野村に耕作権がある田であろう。＜井桁＞は、四角な方形の状態の田を意味している。＜横渡＞は、かつて入り海だった頃、真っ直ぐに歩いて渡れた場所を言ったものだろう。＜森ノ上＞は、宇和田の北に隣接している。森は土地の小高い処を指し、「上」は溪流の上流を意味する。現地は、海蔵寺川の上流部であり、全体に小高い地形である。＜村＞は、内浦の集落の中心部で、所謂、ここが本村である。＜才円＞は、「才」が転じて「幸」に、「円」は「延・園」に通じるので幸が延びると言った瑞祥地名と判じる。＜江後＞は、丘に囲まれた土地という意味である。＜大久保＞は、地形から見て「周囲より大きく窪んだところ」と解したい。＜餅田＞は、「宮持田」で宮を省いて用いられることが多い。＜片山＞は、西側を原村と接する場所で、山の下方の傾斜度が緩やかに変わる地形を言う。＜名切＞は、一般的には浸食地形から判断して、かつて周辺の低地が海だった頃、岬だったと考えられる。＜茶屋ノ前＞は、茶屋があった場所の前を示す地名地点であろう。＜河原＞＜下河原＞は、「茶屋ノ前」を挟んだ西側が「下河原」。東側が「河原」である。「河原」は、沢の行きづまりで、小石や礫が露出した場所を言い、「下河原」は下にあるから「下河原」とした位置地名である。＜芹田＞「芹」は、沢の終わり、端・隅を意味する。現地は浜の砂丘の縁に位置するので、「砂丘の縁にある田」と解して良いだろう。＜梶原＞は、「砂丘の崖などが崩壊しやすい広い砂原」と言った意味の、浸食地名である。＜高人＞は、「梶原」の西側に隣接している。高人の語意は、「人」(ト)で場所を意味するので、「砂丘の高い場所」と解すればよいだろう。因みに、内浦小学校の敷地の標高は二七・四メートルである。海寄りの砂丘部は当然にもっと高い。

### ③ 原

原は、二十七の小字から成っている。まずは、原村の＜原＞の地名から考えてみる。語意にみると、ヒロ(広)、またはヒラ(平)の義で「広い平野」の意味であるが、これは原の地形から見て当たらない。いま一つはハラ(開)の義で、開墾地や林を意味している。あと、場所や山腹を指す場合もあるので、現地の地形と沿革から考えれば「山腹を開墾した所」と言うのが、主意ではないだろうか。かつては現在の集落の場所により、もっと上の山地に点々と家があったようである。原は深い山林山野をバックにした山麓の村である。小名地名の中からも多くを教えられるものと思う。要するに小字で表記される地名は、それに込められた漢字の意味合いと、その地形の態様を言い尽くした、土地の表情そのものと言える。それでは、原村の南に位置する山

地から、それぞれの小字名を拾って掘り起こしていくことにしよう。まず、〈狸穴〉である。ここは湯川山の山頂から西側に続く尾根下で、急斜面の山肌が張り出した場所である。地名としては、夕（接頭語）・ヌキ（抜）で崩壊地形を意味する。「穴」は「三方を丘陵に囲まれた地」、また「穴状に入り込んだ地」を言う。以上から考えると、「谷あい食い込んだ崩れやすい場所」であるが、そうでなければ、文字通りの狸が住んでいる場所としての「狸穴」である。〈岩ノ上〉「狸穴」の北東直下に位置する山地であるが、北側部分に南北に延びた台地があり、これが岩石の突起部分かと思われる。したがって「岩ノ上」は、地形をそのままに表現した形状地名であろう。〈樽見谷〉「狸穴」の北西直下に隣接する山地である。「樽見」はタル（垂）・ミ（廻）で「断崖」などを言うが、ここでは現地の地形から見て、タルム（弛）で「たわんだ地形」を取り、「広くたわんだ大きな谷」の解釈を取りたい。〈薬研谷〉薬研は、漢方薬を調合するため、薬種を粉にする舟形に凹んだV字型の器具である。この谷は、谷の状態が薬研の形に似た大きな谷で、これも土地の形状地名である。〈渡瀬〉一般に「歩いて渡れる海の浅瀬」と言うのが語意であるが、現地は海どころか山中である。地図で見ると現地は現地であるが、ここはかなり広い台地が開けている場所がある。その中央部がわずかに突起しているが、その状態があたかも海岸の干上がった瀬の様子に似ていると言うのが、その意味合いであろう。〈下ノ大谷〉〈兎谷〉どちらの字地も西側を波津に接する山地である。〈兎谷〉は、下ノ大谷の北に隣接し、西側は波津との境界に接している。〈原野〉山地ではあるが、西側を波津に接する緩傾斜地である。「原」は、ヒロ（広）・ハラ（開）・ヒラ（平）の義で、場所を意味することもある。ノ（野）は荒野・草むらなどを意味するが、現地は標高八〇メートル程度の展望の効く山腹である。〈水源山〉原野の東下に隣接する場所で、全体に北側に開けるかなりの傾斜地である。この辺りの谷あいが源流となり、溪流が生じていることから、その水源地であることを指した地名であろう。〈梅ヶ谷〉「水源地」の東側に隣接する山地で、優雅な地名がついた小字地である。ウメ（埋）で、山崩れで土砂などが堆積した場所の可能性もある。〈礫石〉「梅ヶ谷」の東隣で、内浦との村境にある。〈一の井出〉井出は、井堰・用水路を指す言葉である。〈北菅原〉〈南菅原〉地図で見ると、原のほぼ中央部に隣り合わせで南・北に分かれているのが「菅原」である。「菅」はスガル（尽）で「屋根が尽きる所」の意味がある。現地は、湯川山の山裾が尽きて、平地の圃場に繋がる場所でもある。「原」はヒラ（平）・ハラ（開）で、開墾地・林・場所を意味する。〈上金藏〉〈中金藏〉〈下金藏〉この三つの金藏は、内浦との山手に接して、西から東北域に上・中・下に分かれて位置している。「カナ」は「曲がった・入り組んだ」崩壊地形、浸食地形を指し、「クラ」は、山中の切り立った断崖・岩の多いところ・谷を意味している。〈草場〉原の西域で内浦村境にある字地である。草場地名は、採草地で共有地を示す地名である。〈小椿〉〈田ノ草〉どちらも「草場」の北側に続く字地で、丘陵大地の突起部分である。「小椿」は小=コ（処）は場所で、ツバ（端）は帽子のツバと同源で、台地の端など地形の先端を指したり、突き出して高くなった所を意味する。〈坂本〉単純に「坂の下」の意である。〈竹ヶ下〉本村の字居田の南側にある、圃場である。「タケ」は「岳・嶽」の用字で、高所を意味する。〈楠田〉本村の入口である西側に接した場所の田地である。〈後田〉現地は、本村と浜山に挟まれた田地である。〈居田〉原の本村である。「居」はヲリで「住居・集落」を示し、「田」は「処」の意であることから、集落の場所を表明している。〈神田〉は氏神の祭祀費用を賄うための田であり、神領田である。〈堀地〉堀は墾で周辺は田と林野が占めている台地であるが、地名としては開墾地を意味している。〈塩屋〉「塩」は、海塩を産出すること。「屋」は湿地または沼、または小さな谷地形を意味する。〈浜山〉〈大松〉何れも海岸に沿って村の北端に立地している。〈浜山〉三里松原の最西端であり、その浜山が尽きる場所である。〈大松〉海岸線に沿って、「浜山」の西に位置する。「大」も「大きい・立派な・主要な」などの美称であり、縁起のよい「松」の字も含めて瑞祥地名と言える。



内浦・原の小字図





#### ④ 波津

波津村の南域は、湯川山の稜線から北側への山の斜面である。その斜面も一様ではなく、急傾斜地もあれば緩傾斜地もある。＜柳谷＞湯川山の山頂を含んだ北側の斜面。「山の放牧地に築かれた土塁の下の傾斜」という意味。＜鳥ヶ尾＞「柳谷」の北西に隣接する。山の背に連峰があるところということ。＜黒崎＞海に面して宗像の鐘崎の境の岬の突端で、津波の最西端の地域である。転の転用で崩壊地形を示している。＜大灘＞黒崎の東に隣接する海岸である。「荒々しく危険で不安定な磯がある場所」。＜馬掛原＞樋太郎の北側に隣接する。「台地が開け崖もある大きな谷間」。＜磯辺＞「馬掛原」の東に隣接する。東西に長く続く海岸域である。「岩石の多い波打ち際」。＜後口＞「磯部」の背後、すなわち南側に隣接した山地である。「山の北側の端」。＜広尾＞「後口」の南域に隣接する。広大な山地である。「広々とした山裾」。＜釜蓋＞「広尾」の南側に隣接する山地である。「釜底のような窪地」。＜大谷＞釜蓋の南東に広がる山地で、面積も樋太郎に次いで広い山地である。「大きい谷」。＜小山＞大谷の東隣で、原村と境を接する山地である。「山の裾」。＜土谷＞「小山」の北側に原村との境域に伸びているが「土谷」である。「台地の端の谷」。＜小草屋＞波津の南東部の奥深い山地であるが、地名が示すように山裾の谷合いである。二つの峯がある山の傾斜地。＜大谷口＞「小草屋」の西に隣接し、さらにその西隣が「平口谷」である。「大きい谷の縁」。＜平口谷＞山の中腹の斜面の多い谷。＜山ノ口＞「平口谷」の西側に隣接した字地である。田畑などの耕地がある山への出入り口。＜下湯川＞山ノ口の北に隣接し平口谷や大谷口を源流とする湯川が、この地域の南から北へ貫流している。「湯川地区の下方」。＜伊三田＞津波浦の真上にある山の南東山との谷間を占めている。山がずれ動く山麓の水田。＜薄川＞「山の尾根の尽きる場所」。「山の谷あいの痩せ地で湧き上がる水がある地」。＜算田＞波津の集落字「仲」の真上。「台地に散らばった田畑」。＜鳥越＞波津の東部にある山地。「峠道の山の鞍部」。＜山ノ田＞「鳥越」の東側にある狭い地域。「畑地がある処」。＜向鼻＞現地は、原の妙見から波津に入る入り口である。「相對する原村への先端の場所」。＜仲＞地域の地理的中央を意味する。「まとまった集落の中心地」。＜大道＞一般的な例は「大通り」である。「村の通りの分岐点」。＜前田＞「大道」の北側に、海岸に沿ってある津波の集落部である。「波津の氏神大年神社の前にある処」。＜姥ヶ木＞姥は崖地などの崩壊地を示す。「馬が侵入するのを防ぐ柵があった場所」。＜大旗＞集落地で大津波と呼ばれ、集落の中心をなす場所である。「ハタ」は地名に多く、渡来人系豪族の秦氏に因む地名とされている。

※画像を一部加工しています

北  
★斗  
の  
水  
く  
み

— 鑑賞は9月から11月ごろまで —





2019年度 岡垣町・九州共立大学 地域連携事業

# 岡垣学Ⅲ

---

発行 令和2年1月

**山田研究室**

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-8

TEL : 093-693-3403

E-mail : y-akira@kyukyo-u.ac.jp







九州共立大学  
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY